

戊辰戦争150年 新発田藩新たな時代との出会い

ごあいさつ

平成30年は、戊辰戦争から150年目にあたる年です。そこで今回は江戸時代の終わりを予感させる異国船の来航・開国から、西日本・京都・越後・東北での争乱を経て廃藩置県に至るまでの歴史の転換を、市内に残る資料から展示・解説します。時代のうねりの中でそれぞれの立場を貫いた近隣の諸藩や、新しい時代を迎えるまでの新発田藩の姿を紹介します。同時開催として豊田神社の企画・協力による「勝手山御遷座100周年記念豊田神社宝物展」を展示室2で実施いたします。どうぞごゆっくりご覧いただき、悠久の歴史に思いを巡らせていただければ幸いです。最後に本展の開催にあたりご協力いただきました皆様に心からお礼申し上げます。

1. 新発田でも「異国船来航」は他人事ではなかった

嘉永6（1853）年6月、アメリカ合衆国のペリー提督が艦隊を率いて浦賀に来航したことは日本国内に衝撃を与えました。同年11月に新発田藩にも徳川幕府の老中から「和戦」（講和もしくは戦争）の方針が示され、防禦を備え、「義勇」を蓄えるよう伝達されました（資料4）。10代藩主の溝口直諒は、家督を子の直溥に譲り、隠居して健斎と号していました。健斎はペリー艦隊に先立つ異国船の来航をふまえ、嘉永3（1850）年に「報国説」（資料6）を著し、「報国とは皇国の恩に報いる」と、尊王の思想を説き、「もし異船が襲い来るならば、（中略）之が為に死力をつくす」と述べました。その後、「海防論」（新潟県1984）で沿岸防衛の充実・軍艦の整備を主張するとともに、異国船に対して日本が義国として威徳を示すべきと述べています。新潟湊にも安政6（1859）年にロシア船・オランダ船が相次いで来航しています。これに先立ち越後国内では各藩に異国船の漂着や来航に備えた沿岸地域の警備の強化が行われました。「新潟湊之真景」（写真1・資料8）はロシア船が新潟湊を訪れ、沿岸や和船で警戒する新発田藩の様子が描かれています。



写真1 「新潟湊之真景」

2. 異国の情報を集め、世界に目を向ける

このような情勢に際し、新発田藩は、異国の情報を幕府からだけでなく、様々なルートから集めていたようです。

郡方役人の関谷都高は、仙台藩の蘭学者大槻玄沢が刊行に携わった「嶋蘭新譯地球全図」（資料②）を弘化3（1846）年に、玄沢の子の清崇が携わった「新製輿地全図」（写真2・資料②）を弘化4（1847）年に写しています。この二つの世界地図は前者が江戸時代の初め頃、後者が江戸時代の終わり頃の世界情勢を示しており、両者を比較すると、幕末期には極東アジアに欧米列強が植民地を求めて進出している様子を読み取ることができます。

岩船郡板貝村の水主、勇之助（帰国後、良之丞と改名）は、嘉永5（1852）年暮れに松前湊（北海道）から新潟湊へ向かう際、船が難破し、アメリカ船に救助されてサンフランシスコへと渡ります。翌年、ペリー2度目の来航に伴って日本へと帰国しました。新発田藩士の中西氏が良之丞からアメリカの様子を聞き取りした記録を安政2（1855）年6月に写し、英語に接するなど、アメリカの情報を得ています（資料9）。



写真2 「新製輿地全図」（関谷都高写）

3. 異国に備える

文久2（1862）年、幕府は、諸藩が異国船対策に従事できるよう、負担となっていた参勤交代を三年に一回と緩和し、西洋式の軍隊を充実させる政策をとりました（文久の改革）。新発田藩では、下鉄炮町でおこなわれた新発田川の拡幅改修工事で発生した土砂を盛った土地（新築地）に、参勤の緩和により江戸から帰国した藩士を住まわせました（資料10）。また、嘉永4（1851）年4月に五十公野杉原の元御菜園の土地に砲術の訓練所を設け、稽古場としています（写真3・資料③）。

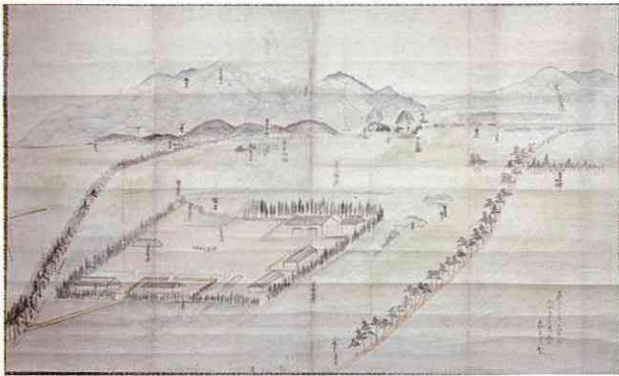


写真3 「砲術角打場絵図」

4. 討幕への道

外国の脅威を知った西国の藩を中心に、国を開き、天皇を奉じて幕府を倒し、新しい時代を開こうとする動きがおこりました。薩長同盟の密約により、薩摩が参加しない第二次長州征伐に、高田藩は越後から唯一参加していました。写真4（資料12）は慶応2（1866）年6月14日未明、芸州（広島）口の小瀬川を挟んで幕府側の先鋒となった彦根藩・高田藩と長州軍との戦闘が始まったときの図で、高田藩の家老中根善次郎・原田兵庫の隊が記されています。その後、7月7日の戦闘で雨天時の銃火器の性能差があらわれ、幕府軍は撤退を余儀なくされます。



写真4 「芸州戦地略図」

新発田藩は、尊王思想が強く、天皇を奉じる新政府に敵対する考えはありませんでした。将軍徳川慶喜による大政奉還を受け、慶応3（1867）年12月朝廷から諸大名が上京するよう命じられ、新発田藩は12代藩主直正が幼かったため、名代として江戸詰めの家老窪田平兵衛（写真5・資料13）が京へ向かいました。窪田は京都留守居役の寺田喜三郎らと協力し、京都の詳細な情勢を国元に伝えます。これが国元の家老溝口半左衛門・半兵衛父子・江戸藩邸の家老溝口伊織らに届き、戊辰戦争の戦火が新発田へ及ぶのを避けるための重要な判断材料となりました（資料14）。窪田平兵衛は京都で新政府側と、国元の溝口半左衛門は奥羽越列藩同盟に対し、藩の立場を踏まえて難しい交渉を進めました。



写真5 「新発田藩家老窪田平兵衛」（中央）

5. 戊辰戦争のはじまりと奥羽越列藩同盟

慶応4（1868）年1月3日、戊辰戦争は鳥羽伏見の戦いにより始まりました。これに勝利した新政府からの出兵要請が、窪田平兵衛から江戸・国元へと伝えられ、合計400名もの新発田藩兵が京に向かうことになりました。一方、越後諸藩が京での情勢を踏まえ、新潟湊および越後国内での対応をどうするのが、会津藩飛地の酒屋陣屋（新潟市）で協議されました（酒屋会議・資料18・19）。ここで、新発田藩が京都へ派兵することが明らかになり、会津藩・長岡藩から詰問を受ける場面がありました。新政府軍は北陸道・東山道・東海道に分かれて、江戸・東北へ向けて進軍し、3月に江戸城が無血開城、北陸道先鋒総督が高田に到着し、閏4月8日高田藩が降伏します。一方、東北各藩は会津藩が新政府に謝罪することで戦争を回避する方針を伝え、長岡藩も中立の立場で新政府との交渉に臨みます。しかし、いずれも却下され、奥羽越列藩同盟成立への道を辿ることになります。新発田藩は越後・東北各藩との衝突を避け、列藩同盟に加わるようになります。

6. 越後での戊辰戦争

奥羽越列藩同盟に加入した新発田藩は新潟港・沼垂港の警備のために沼垂に布陣します。新発田藩は、天皇を奉じた新政府軍と長岡藩との戦いが激しくなっても、長岡藩への援軍を出すことに消極的でした。これが逆に米沢藩から疑いをかけられ、幼い藩主の直正が米沢藩の陣所へ出向くか、さもなくば同盟に違反するとして新発田を攻撃するといった要求を突き付けられます。これに家老の説明や、領民による藩主の訪問の阻止などで対応していましたが、ついに拒み切れず、長岡方面の戦いに参加することになります。

資料16は田井村（見附市）から小貫村（長岡市栃尾地区）の南麓をめぐる、新発田藩・米沢藩が新政府軍と対峙する様子を描いた図です。7月1・2日の攻防が張り紙で示されています。資料17は長岡・見附方面の布陣の様子描いた図です。新発田藩は大曲戸・灰鳥（長岡市）に布陣し、新政府軍からの攻撃に備えますが、積極的に攻撃することはありませんでした。

また、6月には新潟の浜辺付近にも薩摩藩の蒸気船が現れ、上陸に向けての測量が始まります（写真6・資料20）。この頃新発田藩家老溝口半兵衛が京都の窪田平兵衛と連絡を取り、窪田と京で行動していた寺田惣次郎らが高田の新政府軍参謀に接触した結果、新発田藩が新政府軍に内応する交渉が進みます。7月25日に新発田藩領の大夫浜に約1000人の新政府軍が上陸し、一方は新潟へ、もう一方は新発田へ向かいます。

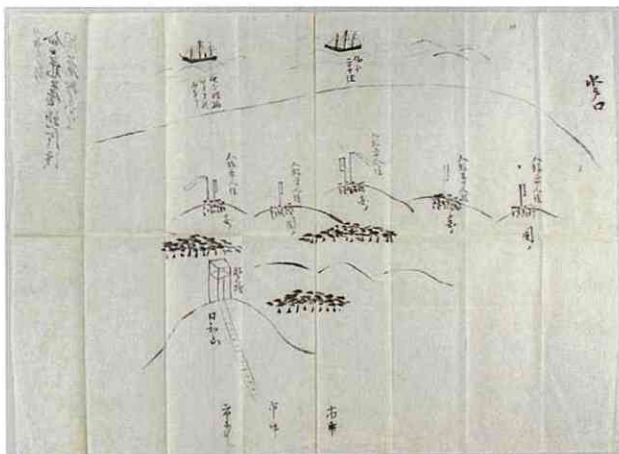


写真6「辰六月会米藩新潟浜固鹿図写」

新発田藩は、新政府側の呼びかけ（資料21）に応じて新政府軍に合流し、藩主直正は柏崎の新政府軍本営に赴いて総督仁和寺宮に謁見しました。

長岡をめぐる攻防で河井継之助が重傷を負い、新発田藩が新政府軍に合流して新潟湊が新政府軍に渡ったことで越後での情勢は新政府側に傾きます。その後、越後から、会津方面を目指すルートを確認するための攻防へと移ります。8月14日、新発田・会津の藩領境の角石原で、新政府軍先鋒の新発田藩兵と会津藩兵との間で激しい戦闘となりました（写真7・資料⑦）。8月22日に新政府軍の会津征討越後口総督仁和寺宮が新発田城に入り、本営が柏崎から新発田へ移ります。

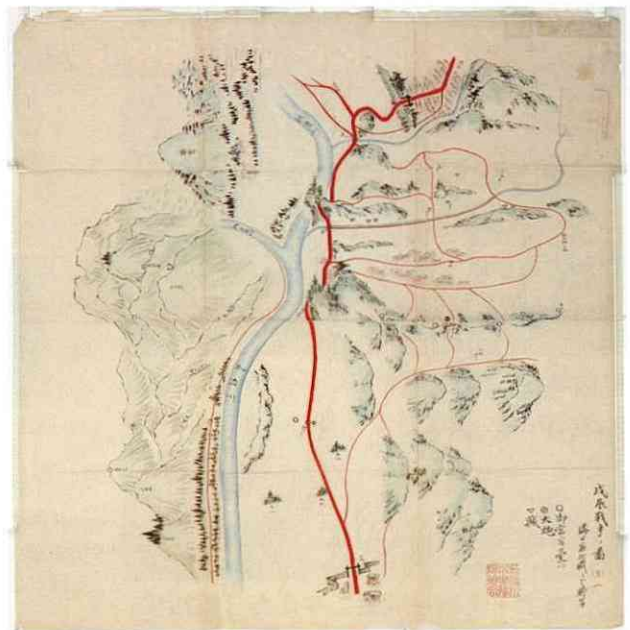


写真7「戊辰戦争の図（角石原）」

7. 廃藩置県と新発田

明治2（1869）年の版籍奉還で新発田藩主は知藩事となり、明治4（1871）年の廃藩置県で藩主溝口家は東京へ移ります。新発田城は廃城令により陸軍省の管轄となり、明治6（1873）年頃から取り壊しが始まります。新発田城は明治5（1872）年頃までに撮影された古写真が残っていますが、明治7（1874）年に作成された測量図（資料⑧）でみると、本丸内の建物は表門を残し取り壊され、二の丸跡地には新たに建設された陸軍屯営の白壁兵舎をみることができます。

主要参考文献

新発田市史編纂委員会 1980『新発田市史』上巻
新発田市史編纂委員会 1981『新発田市史』下巻

東海林久三郎ほか 1998『北前船異国漂流記』瀬波郷土史研究会
新潟県 1984『新潟県史資料編12』近世7幕末編
渡辺れい 2012『最後の決断』新潟日報事業社

豊田神社勝手山
御遷座100周年記念

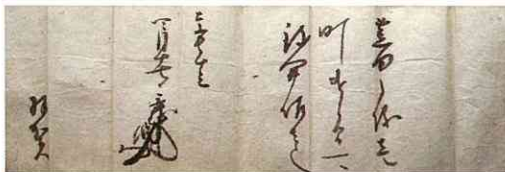
「豊田神社宝物展」



七代藩主・直温揮毫「奉先堂」額
(市指定文化財)



初代藩主・秀勝を伯耆守に任ずる「口宣案」



初代藩主・秀勝が羽賀に与えた「領知状」



菊花紋章四方旗

戊辰戦争に際し、朝廷から下賜された大旗



天盃

文久3年(1863)2月、京都御所御警衛褒賞として十一代藩主・直溥が孝明天皇から頂戴。



御召平陣笠

十代藩主・直諒の陣笠

< 豊田神社略記 >

安永9年(1780)5月

八代藩主・直養、新発田城本丸御殿に歴代藩主を祀る御祀堂を造営

七代藩主・直温「奉先堂」の額を掲げ、以後「奉先堂」と称す

明治7年(1874)

新発田城破却により、奉先堂を城内から五十公野御茶屋隣地に移転

明治10年(1877)11月

神社々格を得て、古称・豊田荘に因み「豊田神社」となる

大正7年(1918)8月

社殿を勝手山々上(現在地)に遷座する(今年で100周年)

大倉喜八郎、社務所に寄進する

大正8年(1919)8月

社格が「県社」に昇格 ※戦後、社格制度廃止

昭和58年(1983)10月

本殿・拝殿・社務所の大修復工事完成

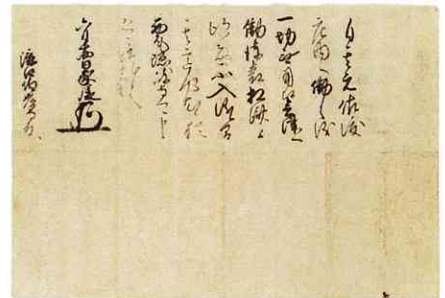
平成20年(2008)6月

十一代・直溥 十二代・直正を合祀



「長重」の木印
(市指定文化財)

初代藩主・秀勝は、丹羽長秀・長重親子に仕え、印を預かるほど信任が厚かった。



徳川家康判物

関ヶ原の戦いの直前、徳川家康は会津の上杉景勝征伐のため、溝口伯耆守に会津出陣を命じた。



大太鼓

新発田城表門前の太鼓櫓にあったもの



「春色九重」

十一代藩主・直溥、十一歳の書

新発田市歴史図書館 秋季企画展

「戊辰戦争150年 新発田藩新たな時代との出会い」

「豊田神社勝手山御遷座100周年記念 豊田神社宝物展」配布資料

編集・発行：新発田市立歴史図書館

新潟県新発田市中央町4-11-27

刊行：平成30年10月5日